様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ９ 月　 ７ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６４６３５２５

研究課題名（和文）長期追跡に基づく在日コリアン高齢者と日本人高齢者の抑うつの要因にかんする研究

研究課題名（英文）A study on factors of depression elderly Korean residents in Japan and Japanese elderly people based on long-term follow-up

研究代表者
伊藤　尚子（ITO, NAOKO）

名古屋大学・医学系研究科（保健）・助教

研究者番号：８０４５６６８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：　在日コリアン高齢者は日本人高齢者と比較して、抑うつ傾向が高いことが明らかになっている。なかでも朝鮮半島出身の在日コリアン高齢者は過去の生活状況が脆弱であったことなどの影響から、同年代の日本人高齢者と比べ健康格差がある可能性が考えられる。本研究では、抑うつ傾向が47.8%にみられ、友人と会う頻度、外出頻度、趣味を楽しむ機会が少ない群ほど抑うつ傾向の割合が高くなる傾向がみられた。在日コリアン高齢者の精神的健康の保持増進のためには、友人と交流を持つ機会を作ることや高齢者が近隣で社会活動を確保できる場所づくりが必要であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：　Compared with elderly Japanese individuals, elderly Korean residents in Japan have been shown to be more prone to depression. In particular, there may be a health disparity between elderly Korean residents in Japan from the Korean Peninsula and elderly Japanese individuals in the same age range owing their poor past living conditions. Here, depressive tendencies were observed in 47.8% of the subjects. Groups with a lower frequency of meeting friends and going out and fewer opportunities to enjoy hobbies were found to be more prone to depression. Our results suggest that the creation of opportunities to interact with friends and visit nearby places where elderly individuals can engage in social activities is critical for maintaining and improving the mental health of elderly Korean residents in Japan.

研究分野：地域看護

キーワード：在日コリアン高齢者　高齢者　抑うつ

１．研究開始当初の背景

高齢者は年齢が上がるとともにさまざまな疾患を発症し、それらの疾患と共につきあいながら生活することになる。高齢者に発症しやすくQOLに影響する代表的な精神疾患がうつ病である。うつ病は高齢期における自殺や閉じこもりの主要な原因ともいわれている。高齢期は加齢による健康状態の悪化、家族や友人との死別体験をする機会も多く抑うつになる危険も高い。高齢期は身体的健康だけでなく、精神的健康への支援を行う必要のある時期といえる。

高齢者と抑うつに関連する研究ではその因子として、身体的健康、慢性疼痛、主観的健康観、家族との会話が少ない、所得が少ない、趣味がない、ソーシャルネットワークサイズが小さい、情緒サポートが少ない、期待できる手段サポートが少ない、介護度が高い、教育歴、独居、転倒等が報告されている。そのなかで、社会的支援は精神的健康を高める効果と、ストレスによる悪影響を和らげる効果の両方を持つとされている。また日本における文化背景の異なる少数派高齢者の抑うつに関する研究は在日コリアン高齢者を対象とした研究があり、大阪など大都市を中心に調査が進められているが、それらの研究により在日コリアン高齢者は日本人高齢者に比べ抑うつを有する者の割合が高いことが明らかにされている。2014年の在留資格別外国人統計によると、在日コリアン高齢者の61%は集住居住地域（大阪、東京、神奈川、兵庫、京都）に居住し、残りの約39%は集住居住地域以外の日本全国に居住している。集住居住地域とは朝鮮人集住居住地域をさし、在日コリアンが運営する民族学校、病院、教会や介護施設があり独自の生活空間を形成している地域であるが、39%の在日コリアン高齢者が居住している地域では地域差別などの原因により、朝鮮人集住居住地域から在日コリアンが転出などすることで、在日コリアン独自の生活空間が消失したり、存在しても遠方で高齢者が使いにくいなどの問題がある。在日コリアンにおいても高齢化は急速に進んでいる状況の中、抑うつ対策は喫緊の課題であり、その予防・改善策を考える上で集住居住地域以外の在日コリアン高齢者を対象とした研究が必要である。在日コリアン高齢者は日本人高齢者と比較して、特に抑うつ傾向が高いことが明らかになっているが、その中でも、朝鮮半島出身者である、在日コリアン１世は過去の生活状況が脆弱であったことなどの影響から、同年代の日本人高齢者と比べ健康格差がある可能性があることが考えられる。また識字率の低さなどの言語的なハンディが、特に高齢女性にみられるなど、調査を進めるうえでも課題が多いなど明らかとなっている。特に精神的健康は自殺対策とも関連しているなど、高齢期の精神的健康の保持は、高齢者への介護予防の観点からも大切な課題といえる。

２．研究の目的

本研究では、在日コリアン高齢者を日本における少数派の高齢者ととらえ、集住居住地域以外の地域を分散居住地域とし、分散居住地域に居住する 65 歳以上の在日コリアン高齢者を対象として抑うつ傾向を把握し、これらの抑うつ傾向と社会との結びつきを家族・親戚・友人との交流及び趣味、外出頻度、近隣とのつきあいと定義しその関連を検討し

た。

３．研究の方法

エスニックグループとの定例会議に継続的に参加し、エスニックグループが運営する介護施設にて定期的な参与観察と、在日コリアン高齢への訪問等を実施しインタビューを行った。また、在日コリアン高齢者を対象とした量的データを用い、抑うつ傾向の関連要因の検討も同時に行った。抑うつ傾向なし群と、抑うつ傾向あり群の２群間の基本的属性について、χ^2検定を用いて比較した。家族･親戚･友人との交流及び趣味、外出頻度、近隣とのつきあいと抑うつ傾向との関連については、抑うつ傾向の有無を従属変数とし、家族･親戚･友人との交流及び趣味、外出頻度、近隣とのつきあいを独立変数としたロジスティック回帰分析を行い、各項目の粗オッズ比と 95%信頼区間を推定した。さらに、年齢、性別、出生地を調整した調整オッズ比と年齢、性別、出生地、治療中の疾患と婚姻を調整変数として調整オッズ比を推定した。解析には統計パッケージ SPSSVer.22 を用いた。

４．研究成果

性別は女性が 67.2%、男性が 32.8%であり、平均年齢は 73.9 歳（SD=6.6）であった。男女別では女性 74.3 歳（SD=6.7）男性 73.0 歳（SD=6.3）であった。また、前期高齢者が 58.2%、後期高齢者は 41.8%であった。出生地は、朝鮮半島で生まれ日本に移民した在日コリアン１世高齢者は 24.1%、日本で生まれた在日コリアン２世高齢者は 75.9%と在日コリアン２世高齢者が多かった。世帯構成は一人暮らし群 14.4%、一人暮らし以外群が 85.6%だった。婚姻については配偶者あり群が 38.3%、配偶者と死別または離別した群が 61.7%であった。治療中の疾患を有抑うつ傾向者が 47.8%にみられた。本研究の在日コリアン高齢者のうつ傾向群は全体の 47.8%であった。この結果は日本人高齢者と在日コリアン高齢者の比較調査の結果である抑うつ 41.8%（GDS-15）と同程度に高いことが明らかになった。また都市部の独居高齢者の抑うつが 43.6%であったが、本研究対象者では世帯構成一人暮らし以外群が 85.6%と家族と同居高齢者が多いにもかかわらず、都市部独居高齢者以上に抑うつ傾向が高いことが明らかとなった。本研究は分散居住傾向が強い東海地区で実施されており、この結果は同じ都市部でも集住居住地域よりも分散居住地域に居住する、在日コリアン高齢者が高齢者同士のつながりの希薄化、孤立が影響している可能性を示唆している。また本調査では、抑うつ傾向と出身地についての関連も示された。出生地（日本で生まれた在日コリアン２世高齢者）が抑うつ傾向あり群は 42.0%であったのに対し、出生地（朝鮮半島で生まれ日本に移民した在日コリアン１世高齢者）が、抑うつ傾向群が 65.6%であった。在日コリアン高齢者の抑うつ対策を考える際に出生地も考慮すべきである。また、抑うつ傾向に関連している因子として、「家族親戚（間接）」、「友人（直接）」「友人（間接）」が関連していた。まず、「家族親戚（間接）」ことについては、交流が「月 1、2 回」群、「接触なし」群で抑うつ傾向との関連がより強くなることが明らかになった。また、「友人（直接）」交流も「月 1、2 回」群、「なし」群で抑うつ傾向との関連がより強くなった。「友人（間接）」では、「ほぼ毎日」の群に対して、「な

し」群がより関連が強くなるなど、抑うつ傾向と同居以外の人との交流にも関係があることが明らかになった。斉藤らは同居者以外との対面・非対面交流をあわせて週に１回未満という状態までがその後の要介護状態や認知症と関連し、月１回未満になると早期死亡とも密接に関連する交流の乏しさであることを指摘し社会的孤立と定義している。また社会的孤立と抑うつ傾向の関係について小林らは心理面の問題を抱えることで、より社会的孤立が強まることを指摘している。本研究の場合は抑うつ傾向ではあるが、社会的孤立と精神的健康との関連を示す先行研究を支持している。また、斉藤は孤立した状態は精神保健的にネガティブな状態であることが予想され、社会的孤立は自殺の危険因子であることを指摘している。在日コリアン高齢者の死因については、李らが在日コリアン人口の高齢化と死亡の動向を調査しているが、その結果によると、在日コリアンの男性の死因では悪性新生物と自殺が高いことが示されている。このことから社会的孤立を予防することは、在日コリアン高齢者の精神的健康を保つ上で効果がある可能性を示している。本研究でも、同居者以外との直接的な対面交流だけでなく、電話や手紙などの間接的な交流が少ないほど抑うつ傾向が増加しているなどしていた。本研究結果より、在日コリアン高齢者のうつ病の早期発見、自殺予防という観点では同居者以外の家族、親族、友人などと月 1、2 回程度しか交流ができていない者はハイリスク群と考えられる。また、予防という観点からは、同居者以外の家族、親族、友人など週 1、2 回以上の交流が精神的健康維持の目安になることが示唆される。また、抑うつ傾向に関連している因子として、「外出が少ない」こと、「趣味がない」ことが明らかになった。外出頻度と身体、社会的活動レベルには関連があり、高齢者の健康活動指標になると言われている。本調査の結果においても、外出頻度が少ないほど抑うつ傾向の者の割合が少なく、在日コリアン高齢者にとっても外出の頻度は精神的健康度の指標になりえることが明らかとなった。特に「週 1、2 回」と少なくなった群から、より抑うつ傾向の者が増加しており、「週 3、4 回」以上の外出を促すことが抑うつ傾向を予防する目安になると考えられた。趣味については、高齢期となると今まで行ってきた家庭内や社会での役割が無くなり、高齢者自身が生活リズムのコントロールすることが必要になる。しかしながら、高齢のためコントロールがうまくいかない場合、閉じこもりや、寝たきりにつながるリスクが高くなると予測される。また、高齢期の社会活動への参加もよる効果については、趣味活動を通じて社会活動をすることにより「新しい友人を得ることができた」が 48.8%。「生活に充実感ができた」が 46.0%、「健康や体力に自信がついた」が 44.4%となっており。趣味が高齢者の QOL 向上に貢献していることが示されている。また、愛知県で行われた AGES 調査の中で、趣味がある人は抑うつがなく生活満足や幸福感が高い傾向にあること、趣味の有無が介護予防のスクリーニングになりえることが指摘されている。本調査の結果としても、趣味がある群は、抑うつ傾向あり群と関連していた。「趣味がとても多い」群に対し、「特に趣味はない」群のオッズ比は約 5 倍と高く在日コリアン高齢者であっても、日本人高齢者

と同様に、趣味の有無が介護予防のスクリーニングになり得る可能性が示唆された。しかしながら、趣味活動と社会経済的地位には関連があることも指摘され、低い教育年数（6年未満）と低い所得（200 万以下）に趣味なしが多く、趣味のないものは心理社会的に好ましくない状態にあることが指摘されている。抑うつ傾向者のうち、朝鮮半島で生まれ日本に移動した在日コリアン１世高齢者が、日本で生まれた在日コリアン２世高齢者に比較して有意に高い結果となった。友人と直接会う頻度、友人と間接的なやり取りをする頻度、外出頻度、趣味を楽しむ機会が少ない群ほど抑うつ傾向の割合が有意に高くなる傾向がみられた。在日コリアン高齢者の精神的健康の保持増進のためには、在日コリアン高齢者が家族友人と交流を持つ機会を作ることや高齢者が近隣で社会活動を確保できる場所づくりが必要であることが示唆された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

・伊藤尚子.分散居住地域の在日コリアン高齢者の抑うつ傾向に影響する社会との結びつき、東海公衆衛生雑誌第 5 巻第 1 号 2017 年、P137-143（査読あり）

・文鐘聲.在日コリアン超高齢者の社会経済的状況と健康、QOL. 老年社会科学，39(1)，2017 年.P66-71（査読無）

〔学会発表〕（計 4 件）

・伊藤尚子,文鐘聲,金永子,三澤仁平．在日コリアン高齢者の転倒関連要因-分散居住地区での検討‐日本公衆衛生学会総会、大阪、2016 年

・伊藤尚子,文鐘聲，金永子 在日コリアン高齢者の学歴と QOL との関連 日本老年社会学会学、松山大学、2016 年.

・伊藤尚子 在日コリアン高齢者の福祉課題に関する文献レビュー－2000 年から 2016 年を中心に－日本地域福祉学会、松山大学、2017 年.

・伊藤尚子 在日コリアン高齢者のレジリエンス－在日１世女性高齢者を事例に－
東海社会学会、名古屋大学、2017 年.

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織

(1)研究代表者
伊藤尚子（ITO　NAOKO）・助教
名古屋大学・医学系研究科
研究者番号：80456681

(2)研究分担者
金永子（KIM　YONNJYA）
四国学院大学・社会福祉学部・教授
研究者番号： 50161550

(3)研究分担者
文鐘聲（MUN JYONSONN）
畿央大学・健康科学部・准教授
研究者番号：50460960